

台地上の農村地帯に名馬が集結 － 美浦トレーニングセンター －



農地が少なく整備工事に適したなだらかな山
林丘陵地帯であったことから、茨城県のみほ村
が関東の競走馬のトレーニングセンターに選ば
れたのは昭和42(1967)年12月のことでした。



昭和53年の開場以後、各馬場などを新設改造
し現在に至っています。

美浦トレーニングセンターは、中央競馬、地方
競馬を問わず日本最大の競走馬のトレーニング
センターとしての規模を誇っており、みほ村の台
地上に一つの街を形成しています。



地理院地図3D(写真) 高さ:5倍に強調

谷津田から沖積平野の水田へ

関東地方の丘陵部には、谷が台地を刻んでできた地形が良く見られます。これらの地形は地域によって「谷津」「谷地」「谷戸」などと呼ばれています。稲作が伝播した初期のころは、洪水から免れやすく、同時に台地や丘陵のふもとからの湧水をそのまま利用できる「谷津田」の開墾からはじまったと考えられています。その後、渡来人のもたらした新技術により低湿地の排水や微高地の用水が可能となり、稲作の中心は広大な沖積平野に移っていきます。

■“常陸風土記”に見る谷津田の開墾

奈良時代に編纂されたと伝わる“常陸風土記”には茨城県行方地方の谷津田の開墾の話が残っています。「古老の話によると継体天皇の時代（西暦500年代前半）に、この土地の人で箭括麻多智という人が郡役所の西の谷にある葦原を開墾して新たに田を作った。・・・その後、壬生連磨がその谷の池に堤防を築いた。その池を椎井の池という」とあり、奈良時代よりももっと前から谷津田が利用されていたことがわかります。



椎井の池付近の谷津田



椎井の池

この図で、オレンジ色に見えるところが台地面、谷津田の間に組み入られた薄黄色が谷底平野（谷津）、谷津田に面した緑色のところが沖積平野

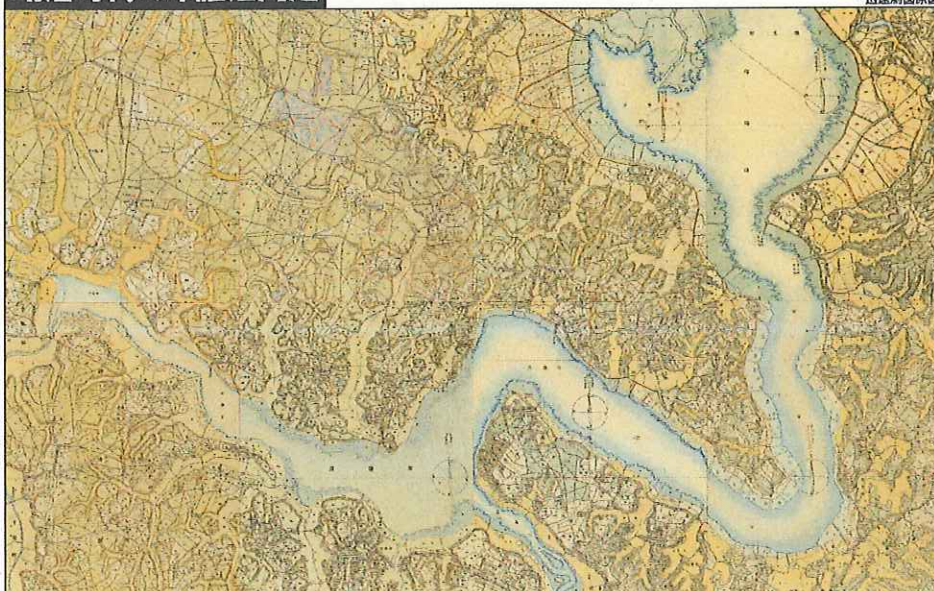


■印旛沼の干拓

千葉県の北部、利根川右岸の印旛沼は現在は干拓によって北印旛沼と西印旛沼に分けられてしまいましたが、「W」の形をしていた印旛沼の姿を地図などで見て覚えている方もいることでしょう。印旛沼の干拓は新田開発や水運確保の目的で江戸時代から何度となく試みられてきましたが難工事や資金不足のため失敗を繰り返しました。

本格的な干拓が再開したのは太平洋戦争後の昭和21年（1946年）。洪水時に印旛沼の水を東京湾に放流する“印旛放水路”が昭和44年（1969年）に完成するのに合わせて干拓が進み現在のようになりしました。

明治時代の印旛沼周辺



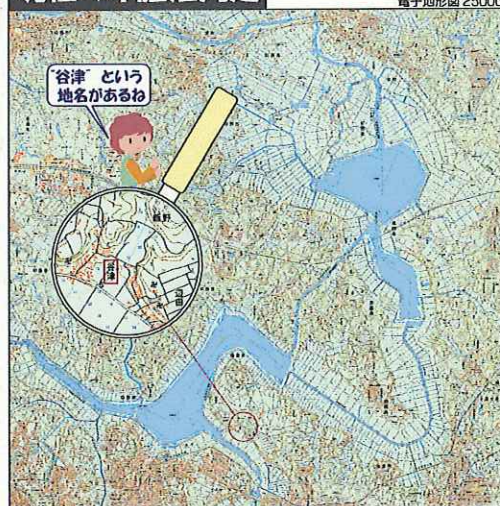
迅速利国図

戦後の印旛沼周辺



1947年撮影

現在の印旛沼周辺



電子地形図 25000

印旛沼の干拓といえは「田沼意次」が有名だね



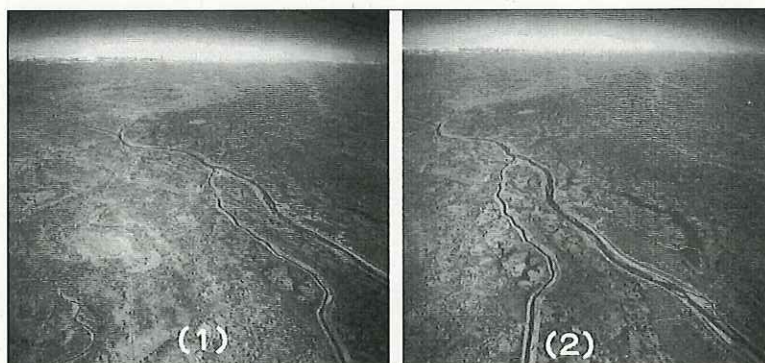
消えた湖沼群

ー 茨城県境町から坂東市一帯 ー



明治16年の地図(迅速測図)を見ると、現在の五霞町、古河市、坂東市、境町一帯に湖沼が多くあることがわかります。特に河に囲まれた五霞町には小さな湖沼が多く、利根川の東側には、少し大きな湖沼がいくつか見られます。

昭和21年の空中写真では、古河市や五霞町一帯の湖沼は埋め立てられ、耕地整理が終わり水田になっていることがわかります。しかし、坂東市周辺では、まだ大きな湖沼を見ることができます。



昭和21(1946)年米軍撮影

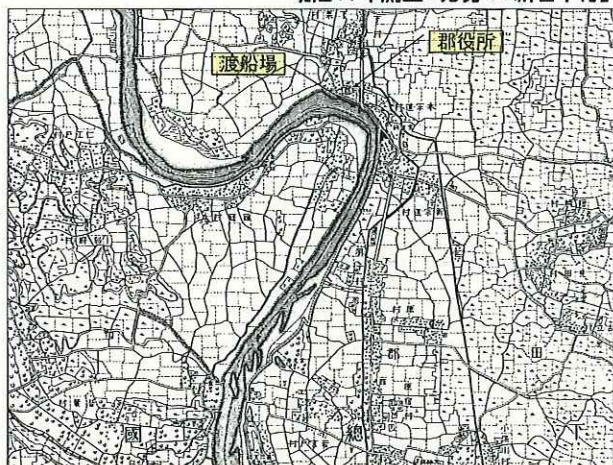
昭和28年の地形図を見ると、その湖沼群も埋め立てられてどこにあったかも解らなくなっています。埋め立て地など土地の歴史を知っておくことは防災や減災の上で重要なことです。



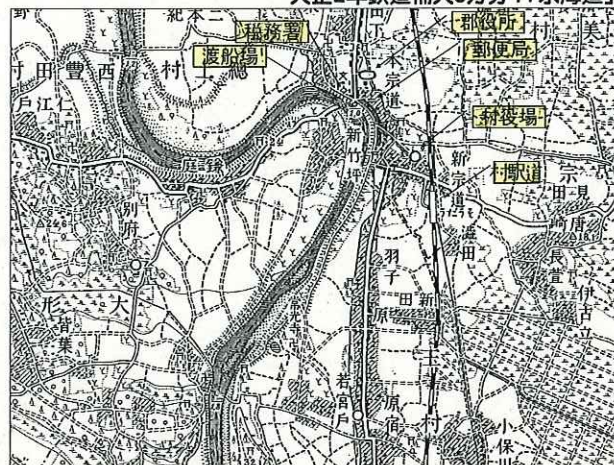
かつてのにぎわいはどこへ

— 下妻市宗道河岸 —

明治17年測量2万分1「新石下村」

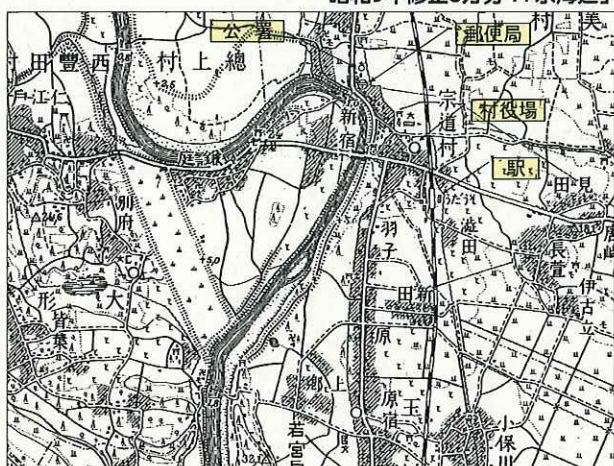


大正2年鉄道補入5万分1「水海道」

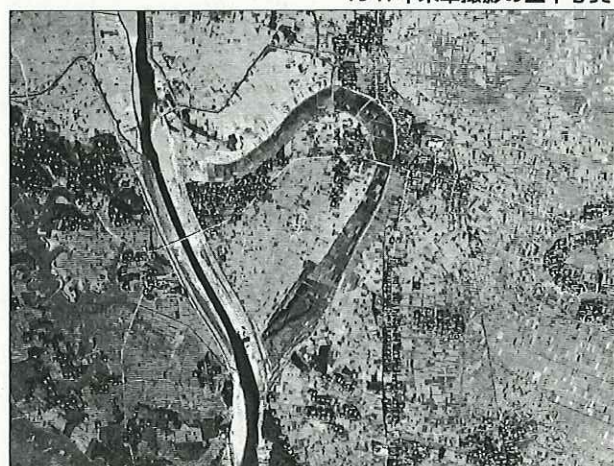


宗道(現、下妻市宗道)は、鬼怒川三大河岸の一つで江戸と常陸・下総を結ぶ高瀬舟の発着場となっており、物資がここから江戸に積み出され、江戸からもさまざまな物や文化が流入し、盛時には数十隻の高瀬舟が往来しました。明治期には役所、税務署、郵便局、旅館などが集まり、この地方の政治・経済・文化の中心地とされてきました。大正2年に常総鉄道が開通するまで隆盛を極めたと言われています。

昭和9年修正5万分1「水海道」

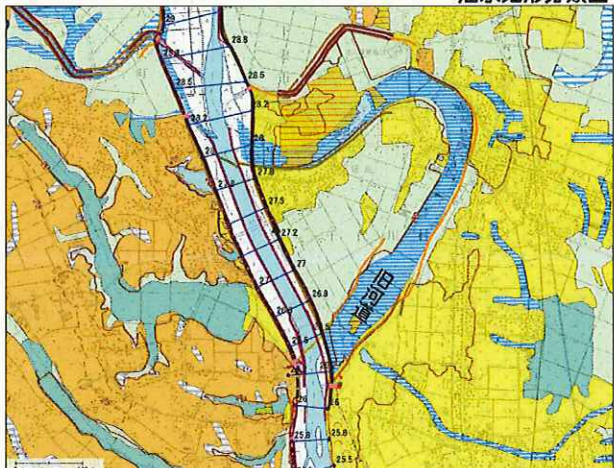


1947年米軍撮影の空中写真



一方鬼怒川流域では、洪水が相次ぎ、特に明治43年8月の洪水では、鬼怒川を含め関東全域で浸水被害が発生しました。このため大正15年に鬼怒川改修計画が策定され、昭和2年から工事が始まり昭和10年に現在のような流れになりました。また、旧河道は主に水田へと変わり、宗道の渡船場はなくなりました。

治水地形分類図



電子地形図25000



治水地形分類図は、洪水や地盤災害に対する危険性の把握に役立つため防災計画等の参考にできます。

時代とともに移り変わる風景

1. 科学万博会場跡地の今は？(つくば市)

科学万博EXPO'85は、日本で3番目の万博で、昭和60年(1985)に茨城県筑波郡谷田部町(現:つくば市)で開催されました。その開催されたメイン会場の跡地に公園が作られました。

現在は万博当時を思わせるものはほとんど残っていませんが、公園にあった岡本太郎制作の像は万博記念公園駅前に移設されました。その他の跡地は、筑波西部工業団地として民間企業の研究所などがあります。



1948年撮影



1974年撮影

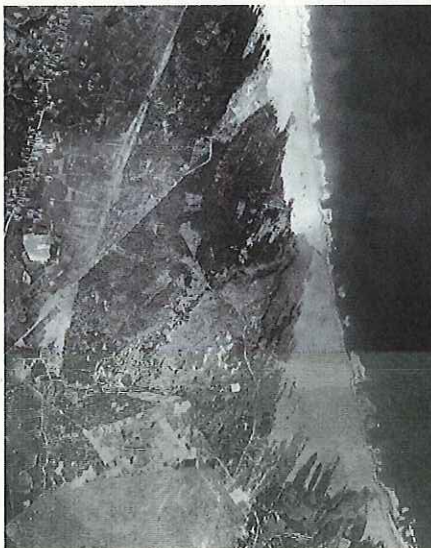


2014年撮影

2. 米軍の射爆場が今は海浜公園等に(ひたち海浜公園)

国営ひたち海浜公園は平成3年(1991)10月5日に開園しました。総面積は350ヘクタールで、その内約55%の191.9ヘクタールが実際に公園として利用されています。かつてこの海岸砂丘地帯は、明治42年(1909)に日本陸軍歩兵第二連隊が水戸へ移転して以来、実弾射撃演習場として使われるようになり、その後、昭和13年(1938)に水戸陸軍飛行学校、陸軍水戸飛行場が建設され、第2次世界大戦後には米軍水戸射爆撃場となっていました。

その広大な敷地は昭和48年(1973)に日本政府に返還され公園として整備されたものです。



1961年撮影



1982年撮影



2011年撮影

時代とともに移り変わる風景

1. 常磐炭鉱の町から観光の街へ(いわき湯本温泉)

明治中期から始まった炭鉱業は、1960年代になると、公害規制がきびしくなり、硫黄分の多い石炭は大気汚染の元凶となりました。そのため産出資源の競争力が失われ、常磐興産会社は石炭産業から観光産業への脱却を図り、昭和41年(1966)には常磐ハワイアンセンター(現・スパリゾートハワイアンズ)をオープンしました。狙いは見事成功し、常磐湯本温泉(現・いわき湯本温泉)の名を一気に高めました。従業員には、失業した炭鉱従業員とその家族を採用するなど、雇用の場ともなりました。

また、1961年撮影の航空写真からは、炭鉱労働者とその家族の住居となった長屋群と改築されたアパートを見ることができます。



1961年撮影



1982年撮影



2011年撮影

2. 高速道路は国道・幹線鉄道を離れて旧街道へ(中央道上野原付近)

上野原市は、山梨県の中部最東端に位置する市です。かつては北都留郡上野原町と南都留郡の秋山村でした。平成17年(2005年)2月13日、隣接する二つの町村が合併して上野原市が誕生しました。

中央自動車道路は昭和44年(1969)3月17日に開通しましたが、上野原インターチェンジは、後に追加され昭和64年(1989)9月27日に開通しました。

市の総人口はね平成2年(1990)頃から増え始め、それに伴い住宅個数も増え始めましたが、平成22年(2010)の国勢調査によると、総人口は27,114人で、2005年より減少しています。



1948年撮影



1974年撮影



2008年撮影

時代とともに移り変わる風景

1. 広大な貨物ヤード跡が大規模ショッピングモールに(新三郷ららシティ)

埼玉県三郷市新三郷の大規模ショッピングモールは、武蔵野線操車場跡地に建設されたもので、その武蔵野操車場は、昭和49年(1974)に武蔵野線が開通した1年半後、同線の吉川駅と三郷駅の間に日本最大(全長5.2km、最大幅約350m)の操車場として誕生しました。

しかし、国鉄の経営悪化等の影響によるヤード集結型貨物輸送の廃止にともない、開業わずか10年後の昭和59年(1984)に機能を停止し、廃止されました。その後、跡地の開発計画が進み平成7年(2007)11月に、全街区の総称を「新三郷ららシティ」とすることが発表され、平成21年(2009)に大型ショッピングセンターとして開業しました。



1947年撮影



1974年撮影



2013年撮影

2. 房総半島への利便性を図りスイッチバックを解消(大網)

明治29年(1896)1月に蘇我～大網間19kmが房総鉄道会社による普通鉄道として開通されました。大網駅は、明治40年(1907)房総鉄道が買収され、国有鉄道の駅となりました。当時東金駅方面から千葉駅方面と安房鴨川駅方面に分岐する東線(現・外房線)は、現在の東金線ホームより400mほど東金駅寄り、茂原から蘇我へは大網駅で進行方向を換えるためにはスイッチバックが必要でした。

しかし、昭和47年(1972)に大網駅が現在の場所へ移転し、スイッチバックが解消されました。反面、房総東線と西線を一周すると蘇我駅で車両の前後の向きが逆転するため、房総半島を循環する列車の設定が困難になりましたが、かつての房総東線線路は貨物列車用として平成9年(1997)まで残っていました。



1961年撮影



1974年撮影

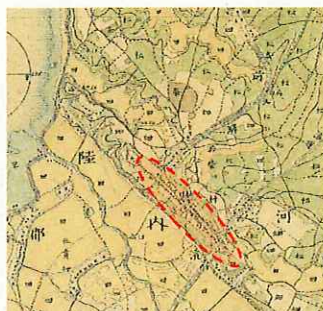


2007年撮影

昔ながらの街並みや風景が今に残る

1. 宿場町 水戸街道の「若柴宿」

龍ヶ崎ニュータウンと常磐線佐貫駅の間に旧水戸街道の若柴宿があります。若柴宿は、江戸日本橋を出て、8番目の宿場で、大坂の曲がりから金龍寺までの約500mが宿場として栄えた場所です。明治19年(1886)の大火で、建物の大半が焼失しましたが、今も宿場の趣を残した古い門構えの家並みが続き、寺社が点在しています。



迅速測図「牛久村」
明治14年(1881)



2013年撮影



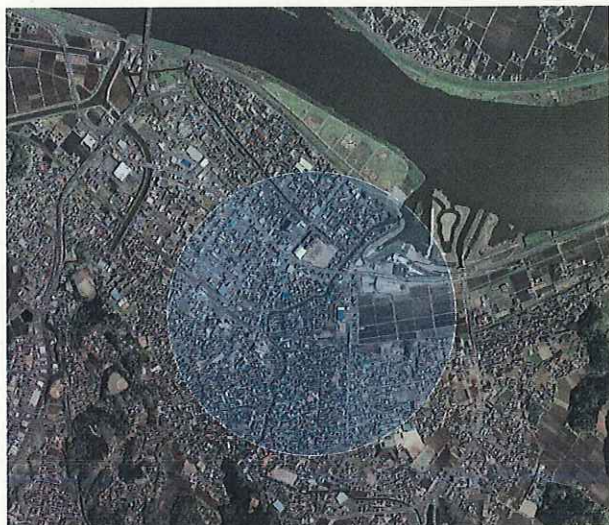
地理院地図



2. 水運で栄えた町「佐原」

水運で栄えた町「佐原」は、江戸時代に利根川による舟運が盛んになり、小野川沿いなどが物資の集散地として栄えました。日本地図を作ったことで有名な伊能忠敬も佐原村の伊能家の婿となり、酒づくり、米や薪などの商人であったことはよく知られています。

佐原は、江戸時代末期から昭和時代前期に建てられた木造建築などが、重要伝統的建造物群保存地区として、今でも小野川沿いに当時の町並みが残され、小江戸と呼ばれています。



2010年撮影



迅速測図「佐原村」
明治18年(1885)

